盆器を考える

田中本家博物館の盆器コレクション③

「錦鉢の世界　〈田中本家秘蔵の盆器〉」展レポート

Bonki:
Based on the research about Tanakahonke's flowerpot collection 3
Report of the exhibition "World of Nishiki-bachi : Tanakahonke's flowerpot"

佐久間 真子
（愛知県陶磁美術館　学芸員）
SAKUMA Masako

概要

この「盆器を考える」と題したシリーズは、信州須坂藩の御用商人をつとめた田中本家の生活の品を保存公開する「豪商の館　田中本家博物館」所蔵の盆器コレクションの調査をきっかけとし、江戸時代後期からの園芸文化とともにあった、様々なやきものの盆器について資料紹介と考察を行っていくものである。

今回は、2014 年 6 月 13 日（金）～9 月 8 日（月）に開催された、同館では初となる所蔵盆器の展示「錦鉢の世界　〈田中本家秘蔵の盆器〉」について、その補助を行った筆者がレポートを行うものである。

1.　企画展「錦鉢の世界　〈田中本家秘蔵の盆器〉」について

この「盆器を考える」と題したシリーズは、信州須坂藩の御用商人をつとめた田中本家の生活の品を保存公開する「豪商の館　田中本家博物館（以下、田中本家博物館）」（註 1）所蔵の盆器コレクションの調査をきっかけとし、江戸時代後期からの園芸文化とともにあった、様々なやきものの盆器について資料紹介と考察を行ってゆくものである。

このたび、同館では初となる所蔵盆器による企画展が開催された。今回は、その展覧会の補助を務めた筆者による、展覧会レポートを記すことにする。

《展覧会概要》
展覧会名：企画展「錦鉢の世界　〈田中本家秘蔵の盆器〉」
会期：2014 年 6 月 13 日（金）から 9 月 8 日（月）

会場：田中本家博物館　第 5 展示室
展示点数：盆器 39 点（うち黒楽焼の鉢 31 点）、盆卓 2 点、参考資料 2 点　計 43 点（図 1）
特別出展：田哲園（註 2）による万年青 26 鉢の屋外展示（図 2、図 3）

今回、同館では盆器コレクションの初披露となるため、その蒐集の経緯や性格を示すことが目標とされた。拙稿（註 3）で触れたとおり、同コレクションは近世～近代の陶器･磁器の鉢とともに、大量の黒楽焼の鉢（特に上絵付の華やかなものを「錦鉢」と称する）が含まれていることが特徴である。そのため、展覧会タイトルのとおり、錦鉢を中心に据え、そこに肥前、京都、瀬戸の鉢を加えて構成することとなった。

同博物館に所蔵されている、田中本家において大正期に撮影された写真をパネル化し、参考展示とした。そのほか、さいたま市大宮盆栽美術館より画像を借用した三代歌川豊国の「四季花くらべの内　秋」（初刷　嘉永 6 年(1853)）、楊洲周延の「やまと風俗女礼式」（明治 25 年(1892)4 月 20 日）も同様にパネル展示した。

2.　展示作品の詳細

会場では、本コレクションの概要を紹介する前半と、黒楽焼の錦鉢を中心に紹介する後半とに作品を分けた。展示された主な作品を、展示パネル原稿と解説キャプション原稿とともに、カテゴリごとに紹介していく。パネル、キャプション原稿については、極力、平易な表現を用いるよう心がけている。

2-1　展示前半

パネル１
・田中本家の盆器コレクション概要
江戸時代後期の日本では、たいへんな園芸ブームが巻き起こっていました。多種多様な樹木や草花が身分を問わず愛され、それに伴ってこの時期に大きく発展したのが盆器（植木鉢、水盤など）です。その盆器の主要な素材は「やきもの」ですが、陶器、磁器、焼き締めなど様々な種類があり、また、その形状や用途も多岐にわたっています。
田中本家の所蔵する盆器は、江戸後期から昭和期にかけて蒐集されたもので、盆器が使用された当時の園芸の流行や当主の好みなどの様々な要素が入り交って形成された、他に類を見ない独自のコレクションとなっています。総数は 500 点を超えると推測され、現在まで保管されている近世～近代にかけての盆器コレクションとしては、日本有数の規模と言えるでしょう。

パネル２
・コレクションの特徴
盆器コレクションの中には、一般的によく見られる松などの盆栽の鉢から、水石を飾る

水盤、そして朝顔などの草花を育てるものまで、多くの種類があります。その産地は、佐賀県の有田周辺の磁器をはじめ、中国や愛知県の常滑で作られていた焼き締めのものも見られますが、とくにこのコレクションで特徴的なのは、明治期に京都を中心に作られていた蘭や万年青専用の鉢です。

これらの大小さまざまな盆器が、蔵の中に整然と並べて保管されており、さらにその保管状況も使用された当時のまま残っていると考えられます。

また、田中本家には実際に盆器を使用している当時の写真資料も残されており、庭には多くの盆栽や鉢植えが並んでいたことが分かっています。

図 4《瑠璃釉貼付竹雀文鉢》

瀬戸　　江戸後期～明治時代

鮮やかな瑠璃色の釉薬（うわぐすり）と、白い貼付の模様の組み合わせが美しい磁器の鉢は、江戸時代から盛んに園芸に用いられました。特に幕末～明治時代の瀬戸（現在の愛知県瀬戸市）では、こうした装飾の鉢がたくさん生産されていました。

図 5《染付花鳥文鉢》

瀬戸　　明治時代

磁器の鉢の代表的な装飾方法に、呉須（ごす）という絵の具を用いて様々な文様を器面に描く「染付」があります。この鉢は丁寧な筆遣いで、器面いっぱいに牡丹、桜、タンポポなどを描いています。

図 6《染付鳳凰文鉢》

肥前か　江戸後期～明治時代

有田などを中心とした九州の肥前地域も、磁器の鉢の産地として知られています。輪郭をとって丁寧に中を塗っていく描き方は、瀬戸の染付にはあまり見られません。

図 7《染付花文鉢》

瀬戸　　明治時代

鉢の形や脚の形、そして絵付けも、たいへん凝っている鉢です。明治時代に入ってから瀬戸で使用され始めたクロムという絵の具を用いて、鮮やかな緑色の草花を描いています。

図 8《色絵金彩蝶唐草文鉢》

肥前か　江戸後期～明治時代

染付に、さらに赤、紫、緑などの上絵付けと金彩をプラスした、大変華やかな鉢です。

図 9《藍絵西洋風景図鉢（阿蘭陀写）》

日本　　江戸後期

19 世紀の日本では、オランダから輸入されたやきものが「阿蘭陀焼」として大変人気を集めていました。その大部分は銅版転写というプリント技法を用いた大量生産品です。しかし、日本ではこれらを手書きで写した「阿蘭陀写」と呼ばれる、高級な茶器や食器を作りました。そうした「阿蘭陀写」の鉢がこの作品です。類例は少なく、大変珍しいものだといえるでしょう。

図 10《染付牡丹唐草文鉢》

肥前か　江戸後期～明治時代

型を用いて六角形に成形した鉢です。この鉢は、大正 7 年頃に撮影された「千よふ」の写真にも写っています。写真では、観音竹と思われる樹木が植えられていました。

図 11《上絵金彩山水文鉢》

幹山伝七　明治時代

幹山伝七（かんざん・でんしち）は、幕末から明治初期にかけて京都を中心に陶磁器生産を手がけ、万国博覧会などでも活躍した人物です。また、盆器の世界でも、緻密で上品な絵付けの鉢で高い評価を受けています。この鉢は、底部に「大日本幹山製」と銘が入っています。

2-2　展示後半

パネル３

・華やかな錦鉢

黒く艶のある黒無地の鉢と、そこに多色の絵の具と金で様々なモチーフを綿密に描きこんだ大変豪華な鉢は「錦鉢」と呼ばれ、蘭や万年青の生育に使われました。

桃山時代の京都で登場した楽焼は、主に茶道具の生産で知られていますが、蘭や万年青で使われる錦鉢も各地の楽焼の窯元で現在まで作り続けられています。

図 12《黒楽イッチン青海波文鉢》

未詳　　明治～昭和時代

イッチンと呼ばれる技法で、立体的に波の文様を描いています。イッチンとは、やわらかい粘土をケーキのクリームのように搾りだしながら描く技法です。青海波の部分は青い色をつけています。

図 13《黒楽上絵金彩青海波文鉢》

京都か　明治～昭和時代

白、青緑、赤、黄、そして金の絵の具を用い、たいへん精緻な筆遣いで青海波や瓔珞文、唐草文などを描いています。絵付けの技術は相当なものであったいえるでしょう。このタイプの鉢が蔵にはたくさん残っています。

図 14《黒楽上絵金彩鉢》
京都か　明治～昭和時代
田中本家所蔵の黒楽鉢の中でも、かなり大きなサイズです。京都の楽焼の窯元「短冊家」に残されている文様集（鉢の絵付けの見本帳）に、似たものが見つかっています。

図 15・図 16《黒楽上絵金彩川中島合戦図鉢》
京都か　明治～昭和時代
川中島の戦いで相対する上杉謙信と武田信玄の勇猛な姿が、たくさんの色絵の具で描かれています。鉢の裏面には、「天文弐拾弐年拾壱月　上杉景虎、村上義清の託を受け令を下して武田晴信と大子川中島で戦ふ」と物語の説明文も金彩で書かれており、これだけの凝った鉢は、特別な注文品だった可能性があります。

図 17《黒楽上絵金彩牡丹唐草文鉢》《黒楽上絵金彩七宝文鉢》
丸いボウルのような形の鉢は、富貴蘭（ふうらん）用ものです。田中本家にもサイズは小さめですが、華やかな富貴蘭鉢が複数所蔵されています。

図 18《黒楽鉢》
絵のない鉢は、通常の栽培用と考えられます。大中小様々な大きさの黒い鉢が多数所蔵されています。このことから、万年青などの株を買い求めるだけでなく、当主が自ら栽培を楽しんだとも考えられます。

3.　新出資料について

本展で展示を行ったのは、これまでに拙稿（註 4）でも触れたものを中心としたが、今回、本コレクションの性格を表しているであろう 2 鉢も加えた。それが、図 9《藍絵西洋風景図鉢（阿蘭陀写）》と図 11 幹山伝七《上絵金彩山水文鉢》である。

これらを新出資料として、詳しく紹介しておく。

3-1　藍絵西洋風景図鉢（阿蘭陀写）

3-1-1　阿蘭陀写と呼ばれるやきもの

まず、阿蘭陀写と呼ばれるやきものについて、簡単にまとめておく。（註 5）

17 世紀よりオランダ東インド会社を通じ、オランダの陶器などのヨーロッパ各国のやき

ものが日本に入ってきており、これらは「阿蘭陀焼」と呼ばれた。江戸、京都、大坂などの文化人たちはこれらの品々をこぞって手に入れようとしていた。もちろんこの需要をオランダ東インド会社側も認識しており、大量輸出を試みたとみられる。

そして、日本においてそれらのやきものを写した「阿蘭陀写」が制作される。18 世紀中頃から京都で尾形乾山（1663-1743）が手がけたのをはじめとして、仁阿弥道八（1783-1855）の銘があるものも存在する。

19 世紀になり、日本にさらに大量のヨーロッパ陶磁が輸入された。これらは、プリントウェアと呼ばれた、転写技術を用いて生産されたいわゆる廉価品ではあったものの、当時の日本人には大変に新鮮で魅力的なものと映ったようだ。

19 世紀に、京都およびその周辺で制作されたと推測されている（註 6）阿蘭陀は、乾山らの制作したものとは趣を少し変えている（図 19）。呉須を厚みが出るように盛り、複雑で華やかな花唐草文様や西洋風景画などを器面に描く。主文様の周囲に施される花唐草文様は、異なる器種のあいだで共通したデザインが多く見られることが特徴であり、また興味深い。そして西洋風景画の部分で面白いのは、西欧では廉価な器の代名詞ともいえる転写のドットを、阿蘭陀写ではわざと手書きの点描で再現しているのである。

3-1-2　阿蘭陀写の盆器についての考察

今回、展示した盆器も、口縁と腰から脚にかけては花唐草、胴部には西欧風景図を丁寧に描いており、図 19 などと同様の好みと言えるだろう。（図 20、図 21、図 22）。19 世紀の阿蘭陀写には、茶道具、食籠、刀掛など、変わった器種が多いことも特徴である。おそらく、阿蘭陀写独特の異国情緒あふれる文様を好んだ人々が、本来は金属や木で作られる道具などを次々と阿蘭陀写で作らせていったのだろう。そうした中に本作も加えられる。

伝世する阿蘭陀写の鉢の数は、もちろん通常の染付の鉢等よりは圧倒的に少ないが、現在も意外に目にする機会がある。むしろ、他の器種よりも多く見かける印象さえある。鉢の中には、本作のように陶土が白く、さらにその上に白化粧を施して文様を描くものの他に、褐色の陶土を用いて、文様の地となる部分のみ白化粧を施したものも存在する（図 23）。この類の鉢は、楽忠右衛門作とされる「楽忠」という刻印銘のあるものも存在するが、詳細については不明である。

通常の染付よりも制作に明らかに手間のかかる阿蘭陀写の鉢は、まちがいなく裕福な階層を対象とした高価なものだっただろう。この鉢の存在は、江戸の庶民から大名までが夢中になった園芸の幅広さを示している。どのような樹木あるいは草花に合わせられていたかは不明だが、とかく珍しいものやインパクトのあるものが話題をさらう園芸の世界において、阿蘭陀写は植えられたものの印象をさらに強いものにしたにちがいない。

3-2　幹山伝七　上絵金彩山水文鉢（上絵金彩草花図鉢）

3-2-1　幹山伝七について

まずは本作品名だが、展覧会では「上絵金彩山水文鉢」としたものの、その文様から「上絵金彩草花図鉢」としたほうが相応しかったと思われる。

幹山伝七（1820－1890）は、愛知県瀬戸の出身。1857（安政 4）年から湖東焼に従事した後、京都へ移り磁器を制作した。明治になるとゴットフリード・ワグネルから西洋絵の具の知識を学び、1873（明治 6）年のウィーン万国博覧会などでは京都の陶業界を指導している。「幹山伝七」を名乗ったのは 1872（明治 5）年からである。特に、明治政府最初の迎賓館「延遼館」で使用された洋食器を製作したことで有名である（註 8）。

このように陶磁史においては、京都を中心に活動し、日本窯業界の近代化に尽くした重要人物として知られている。その作品は、明治・大正期に万国博覧会に出品された陶磁器に注目した、近年の展覧会などでもたびたび取り上げられる。（図 24）

3-2-2　盆栽・園芸界における幹山伝七の評価

実は盆栽・園芸界において幹山伝七の鉢は、長年、愛好家垂涎の的となっているのである。さらに幹山のほか、加藤善治（とくに二代：1825－1901）、宮川香山（とくに初代：1842－1916、二代：1858－1945）、伊東陶山（初代：1846－1920）、竹本隼太（1848－1892）、井上良斎（とくに三代：1888－1971）など、幕末から明治･大正にかけて近代日本の窯業史に名を残す人物達が鉢の名手として認知されている。

盆栽・園芸界で知られる幹山の鉢について、銘としては「大日本幹山製」とあるものが多く、そうなると輸出あるいは来日した外国人向けの土産品としても意識していた品ということになる。ただし興味深いことに、幹山の鉢の評価が高まるのは戦後、昭和 45 年大阪万博の頃だと見られるのだ（註 9）。先述の陶工たちが活躍した時代とは約 70 年もの開きがある。

盆栽の代表的な書籍を参照してみると、評価の変遷がおよそ把握できる。大正期の盆栽指導本である金井紫雲の『盆栽の研究鉢の種類』（註 10）の中の「我製」部分で「古瀬戸、古備前、古薩摩、信楽などには往々名品を見ることがある･･･」とある。古瀬戸と古薩摩は、施釉や上絵技法を用いたものとも想像できるが、京焼やその周辺のものは挙げられていない。昭和初期の盆栽愛好家の売立目録や、盆栽に関する雑誌の中でも評価はかなり低いようだ。

ところが、昭和 51 年発行の忍田博三郎の『日本の小鉢と陶工　盆栽小鉢の面白味』（註 11）を参照すると、評価は大きく異なっている。まずは本書の存在自体が、昭和 40 年代の高度経済成長期とともに広がった盆栽・園芸ブームと、それにともなって国内製の鉢の需要が高まると同時に古い国産の鉢にも目が向けられるようになったことを示している。愛知県の瀬戸や常滑の人々にも、昭和 40 年代から 50 年代にかけては盆器が出荷数のピークを向かえていたことが記憶されているように、この盆栽・園芸ブームというのは相当なも

のだったようだ。小鉢の愛好家も激増したのだろう。

この時期、近代の国産の鉢（なかでも磁器の鉢）においては、高い技術を用いて表現された、幻想的な釉の発色や繊細で華麗な絵付けについての評価が高い。中国鉢を最高峰とするそれまでの評価基準とはあきらかに異なる価値観が、盆栽・園芸界で急速に広まっていたのだろう。

3-2-3　田中本家所蔵の幹山伝七の鉢について

現在も幹山作と伝えられている鉢の多くは、正確な型作りの磁器素地に、上絵金彩の繊細な文様を施したものである。

田中本家博物館の所蔵する鉢もこのタイプである。多少焼きひずみがあるものの、底部の脚に至るまで丁寧に形作られている。金と黒呉須（註 12）（黒色の部分）で、側面 4 面にそれぞれ草花文（梅、アヤメ、菊、竹）を描いている。口縁には金彩で細かく花唐草を施す（図 25、図 26）。金の点描で丁寧に描かれている雲や霞の部分も注目される。これらの絵付けに関しては、花瓶や食器など他の多くの幹山作品と作域の共通点が多く、幹山の製陶所の中ではもっともオーソドックスなデザインだったと推測される。銘は、底面に釉下に黒味がかった呉須で「大日本幹山製」とある（図 27）。底部には穴が 2 つ、大きめの目跡も 4 つ残る。サイズは、他の所蔵鉢とくらべれば小振りであるが、幹山作の鉢としては大きいものとなる。

同家で実際にどのような植物が植えられていたかは、今となってはわからない。コレクションに加えられた時期も不明だが、1 点のみの所蔵ということから、人気が高まって入手困難となった後なのではと推測される。おそらく先述の盆栽ブームの頃だろう。あるいは、贈答品として同家に贈られたものかもしれない。

以上の 2 点の鉢は、同家の盆器コレクションの中でも素材・絵付けともに特異なものである。つまり、蒐集した人物は、樹木や草花にのみ興味を注ぐ愛好家ではなく、鉢にも興味関心を持っていたことになる。同家で万年青鉢に強いこだわりを持っていただろう人物として考えられる 8 代目当主の佐賀氏もしくは、つづく一族の人物がこれらをコレクションに加えたのだろう。

4.　まとめにかえて

田中本家博物館の盆器コレクションは、その概要については今回展覧会として紹介できたものの、調査が進行中であることから、全容が分かるのはまだまだ先である。阿蘭陀写や幹山のように、1 点のみの所蔵であってもコレクションの性格付けが進むものも含まれていることが分かった上、コレクションの半数を占める焼締陶の支那鉢や常滑鉢については調査が手付かずである。同家の文書や写真資料からのコレクション分析も課題である。

今回の展覧会に際し、鉢の展示什器を考えている際に、同家所蔵の盆卓の存在も明らか

になった。台数は把握できていないが、栽培だけでなく観賞についてもしかるべき道具を揃え、披露していたことが分かる。さらに、樹木や草花の手入れに使われていた様々な道具類も保管されている。

今後の展開として期待したいのは、やきものの鉢だけではなく、これら保管されていた数々の資料を組み合わせて、幕末から昭和期にかけての田中本家の豊かな園芸趣味を紹介できるような試みである。微力ではあるが、拙稿「盆器を考える」がその一助となれば誠に幸いである。

本稿執筆にあたり、次の方々に格別のご協力･ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略、個人名は 50 音順）

田中本家博物館
田哲園

髙木典利
田中栄二
田中和仁
田中宏和
仲野泰裕
西口郁夫
山崎 学（㈱近代出版・月刊近代盆栽編集部）

《註》

註 1　「豪商の館　田中本家博物館」は長野県須坂市穀町 476 にある、平成 25 年で開館 20 年をむかえる博物館。享保 18（1733）年に初代当主・新八が穀物、菜種油、煙草、綿、酒造業などの商売を手掛け、以後代々須坂藩の御用商人を勤めた北信濃屈指の豪商に成長。その館を利用した博物館で、約 100m 四方を 20 の土蔵が取り囲む屋敷の作りを残している。またこの土蔵には、江戸中期から昭和までの田中家代々の生活に使用された品々が保存されている。この調査は、その蔵のうち 1 つを占める盆器コレクションについて、その年代・産地を解明するとともに、同家での位置づけを探るものである。

註 2　「有限会社　田哲園（たてつえん）」は、長野県長野市赤沼 188 にあり、1965（昭和 40）年頃の創業の万年青専門店。

註 3　拙稿「盆器を考える 田中本家博物館の盆器コレクション ①万年青鉢」、『愛知県陶磁資料館　研究紀要 18 号』、2013、愛知県陶磁資料館

註 4　先掲の註 3 に同じ。

註 5　阿蘭陀焼および阿蘭陀写については、次の展覧会図録を主に参照した。
愛知県陶磁資料館編『阿蘭陀焼　憧れのプリントウェア―海を渡ったヨーロッパ陶磁』、2011

註 6　阿蘭陀写は、その正確な産地は現在まで特定されていない。

註 7　徳尾真砂弘編『KB ムック　盆器大図鑑（上巻）　盆栽鉢の集大成』、2006、株式会社近代出版

註 8　幹山伝七の経歴については、次の展覧会図録を主に参照した。
明治･大正時代の日本陶磁展実行委員会編『平成 24 年度　公立美術館巡回展支援事業　明治･大正時代の日本陶磁―産業と工芸美術―』、2012

註 9　園芸界における幹山伝七の評価については、山崎学氏に引用資料の多くをご提供いただいた上、貴重なご助言を賜った。

註 10　金井紫雲『盆栽の研究』、大正 3 年、隆文館。山崎学氏提供資料。

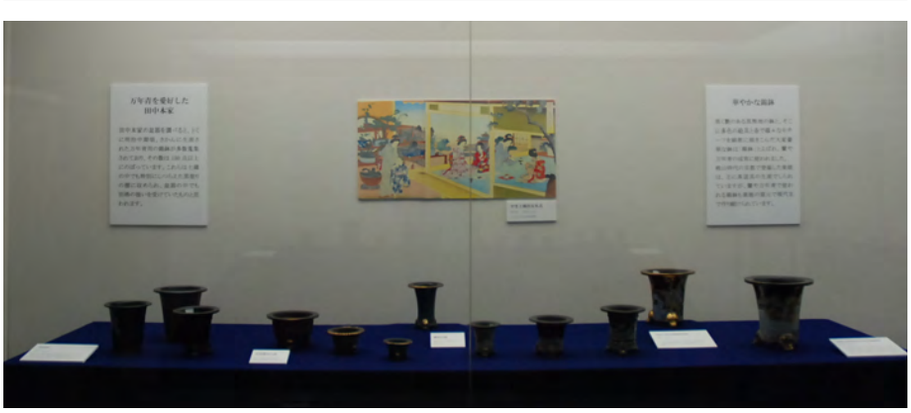
註 11　忍田博三郎『日本の小鉢と陶工　盆栽小鉢の面白味』、昭和 51 年、三友社。山崎学氏提供資料。

註 12　幹山伝七の使用した絵の具についての情報は、髙木典利氏にご教授いただいた。

図１
展示風景

正面
壁面
ケース

右壁面ケース



左壁面ケース

図 2　展示室前の万年青展示

図 3　中庭の万年青展示

図 4《瑠璃釉貼付竹雀文鉢》　W47.7 H:35.7
瀬戸　江戸後期～明治時代

図 5《染付花鳥文鉢》　W:47.2 H:33.9
瀬戸　明治時代

図 6《染付鳳凰文鉢》　W:45.8　H:33.4
肥前か　江戸後期～明治時代

図 7《染付花文鉢》　W:27.8　H:29.3
瀬戸　明治時代

図 8《色絵金彩蝶唐草文鉢》
肥前か　江戸後期～明治時代

図 9《藍絵西洋風景図鉢（阿蘭陀写）》
日本　江戸後期か　W:24.7 H:18.0

図 10《染付牡丹唐草文鉢》 肥前か
江戸後期～明治時代　W:26.6　H:17.0

図 11《上絵金彩山水文鉢》　幹山伝七
明治時代 W:19.0 H:17.3

図 12《黒楽イッチン青海波文鉢》
京都か　明治～昭和時代
W: 12.6　H:13.2

図 13《黒楽上絵金彩青海波文鉢》
京都か　明治～昭和時代
W:12.0　H:12.7

図 14《黒楽上絵金彩鉢》京都か
明治～昭和時代　W:21.3　H:19.5

図 15《黒楽上絵金彩川中島合戦図鉢》
京都か　明治～昭和時代　W:23.5　H:23.8

図 16　同左　裏面

図 17《黒楽上絵金彩牡丹唐草文鉢》
京都か　明治～昭和時代　W:18.4　H:11.8

図 18《黒楽鉢》
京都か　明治～昭和時代

図 19《藍絵西洋風景図硯蓋（阿蘭陀写）》　W:36.0×24.0　愛知県陶磁美術館蔵

図 20《藍絵西洋風景図鉢（阿蘭陀写）》　口縁部分

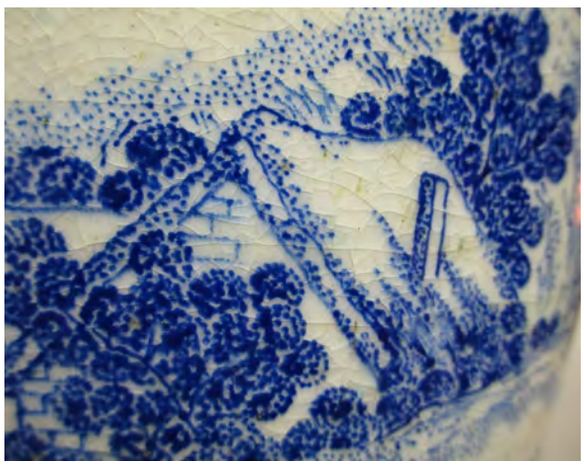


図 21　同左・胴部分

図 22　同上・脚部分

図 23《阿蘭陀写雲鶴文鉢》
京都か　江戸末～昭和　個人蔵
W:20　H:16

図 24《阿蘭陀写虎文鉢》
京都か　江戸末～昭和　個人蔵
W:18.3　H:15.5

図 24《上絵金彩花樹図手付瓶》
京都　幹山伝七　明治時代前期（19 世紀後期）　H28.8
出典：愛知県陶磁資料館 / 瀬戸市歴史民俗資料館 編『磁器の技と美―有田そして瀬戸へ―』、愛知県陶磁資料館 / 瀬戸市 発行、1998、87 頁

図 25《上絵金彩山水文鉢》 各側面

図 26《上絵金彩山水文鉢》 口縁部分

図 27　同左・底部

※図版ページの法量単位はすべて cm。記載のないものは法量未調査のもの。